

『金責めロリ姫エリナ2』  
セクハラ男子を  
ドSロリがフルチン神輿に！



玉子王子 著

## 1章 ロリがビート板でショタの股間を強打する

うさぎ〇学校のなかにあるプール。

四面あるが、第四プールは他の面と違って建物の都合上死角になっている。

他の三面は一人の人間でも見回せるが、第四プールを見ようと思えばそちらに行かなければならないのだ。

そのため教師の目が届きにくく、結構喧嘩や揉め事の舞台となる。

そこで男子四十人ほどが女子八十人に急所集中攻撃で文字通り袋叩きにされ、フルチンで晒されてからまだ一週間だった。

やられたのは関と言う男子率いるY年C組と、その助っ人にやってきたA組の男子たち。

彼らはそれ以来女子の顔色を伺って教室の端のほうでじっと大人しくしている。

……ということはまったくなかった。

第四プールに入ろうとした女子の前に、男子が立って手を広げる。

「このプールは男子が使うんだよ！」

性懲りもなく宣言するのは、関だった。

完膚なきまでに女子たちにやられ、フルチンにされて短小包茎を散々笑いものにされた男。

周りに十人ほどの男子。

前なら、二十人全員揃っていた。

今日は、半分がいない。

争いに巻き込まれないように、一二三のどれかの面にいる。

そちらには教師もいて、こういう勝手な揉め事は起こりにくい。

その代わり、第四プールと違って自由が無いといえば無いのだ。

今は、三時間目と四時間目を使ったY年生の合同プールの時間。

関たち十人ほどはプールの一角でボール遊びをしていて、十分他の人間が入る余地はある。

だが、女子は入らせないという。

男子対女子で、今このうさぎ〇学校は割れている。

というか、一週間前までは男子優勢である程度の秩序があったのだが、女子側に強力な新星が現れてパワーバランスが崩れ、力関係を確定させるための争いがそこら中で起こり始めていた。

関がやっているのも、プールの独占という形を取った復権のための行動だった。

一週間前に肉玉を遠慮なく蹴り上げられ、当たり前のようにフルチンにされて引き回され、クラスのリーダーだった関の立場は地に墮ちた。

まだ男子のなかではトップだが。

しかしクラス全体と見れば違う。

今や彼をフルチンにした女子、**悪鬼**とも**狂獣**ともまだそれほど呼ばれていないが、いずれ呼ばれる事になる後藤田エリナが文句なしにトップになっている。

彼女が転校してきてからまだ一月も経っていない。

それにクラスの主導権を完全に奪われて「はいそうですか」といえる人間なら、そもそもリーダーの地位になど立っていない。

「げへへへへ！」

無理して笑う関。

本当は、今にもエリナが肉玉を蹴りに来ないかと怯えていた。

人体最大の急所を、年端も行かないロリにとはいえ思い切り蹴り上げられた恐怖は大きい。

大体、関自体頑強な大人などではなく、年端も行かないショタである。相手がロリだからと言ってもあまり意味が無い。

それは関だけではなく、周りの少年たちも同じだった。

肉玉を蹴られたり殴られたり、挙句フルチンにされて女子たちに観賞されたのだ、恐怖感が残っていないわけが無い。

横の少年が、引きつった顔を向ける。

「関、本当に大丈夫かよ」

「お前もデブと同じ腰抜け派か!？」

デブとは、クラスメイトの上野のことだった。

上野はエリナが転校して来たその日に肉玉を蹴り上げられ、フルチンにされた不幸な男子の一人。

一週間前のプールでも当然同じ目にあって、完全に心が折れた。

今は男子の中の女子と強調するグループの中心だった。

と言っても、そちらはべつに「エリナに味方しよう」と訴えているわけではない。

関に積極的に味方しないだけだ。

無理に引っ張られないように、ある程度固まって自衛するだけのこと。

「あんな玉無しと同じか!？」

「いや、女子の言いなりにはなりたくねえけど」

「ならがんばるしかない。しばらく遊んだら、飽きたって事にして引き上げるんだ。そうすりゃしばらく好き勝手した、という事実は残る」

チラ、と陸地を見る。

エリナが「キ○タマ潰す！」などと絶叫して走ってきていたりはしない。

「上手いこと対抗できているという形を積み重ねていくんだ。そうすりゃ上野たちも、女なんかに従うのは嫌に決まってるんだからな、男として……絶対俺たちの所に戻る。それで、他のクラスも援軍出してくれるようになる」

前に一度ボロ負けしたので、周りのクラスは支援に及び腰だった。

元々関が一番親しくしていたA組の有力者は前のボロ負けの責任を問われてクラストップの地位から滑り落ちそうで、もう一度エリナと戦ってくれとはいいいにくい状況だ。

そちらも、しばらく時間を与えれば地力があるのだから立ち直ると関は見ている。

そうなれば、さらに他のクラスも誘って今度こそエリナたち女子を倒す。

最後には、男子が勝つと信じていた。

——そうだ、チ○ボも無い連中に負けるわけが無い。

相当歪みきったことを考える。

と、その一物のあたりに何か違和感。

白い棒が足の上に突き出されていた。

「え？」

後ろ、振り返ると、誰かが沈んでいる。

ツインテールのつるぺたロリ少女、○学生らしいスクール水着。

年齢を考えても小柄なその体のどこにそんな力があるのかと、肉玉を蹴り上げられるたびに男子たちは思うのだ。

「うわああああああああっ！ な、なににして……」

Y年C組の狂獣、金蹴りロリ姫エリナである。

彼女が手を離すと、関の太股の間に突き出されていたものが跳ね上がる。

それは発泡スチロールのような材質で出来た板だった。

いわゆるビート板である。

男なら誰でもそれに乗ろうとして、跳ね上がるその板に股間を強打されたことがあるのではないだろうか。

ロケットのように跳ね上がるビート板が、関の股間を直撃する。

海パンに包まれたショタの男の命が二つともゴリッと一瞬ひしゃげ、持ち上げられる。

「おおおあああっ！」

「ぎゃはははは！ キ○タマゲット！」



「はぐぐぐ、な、何しやがる……」

一瞬気絶してプールに浮かびそうになる関だが、唇を噛んでどうにかバランスを保つ。

元々○学生用のプールで、関たちがいる辺りは足がつくのが幸いした。

その関に指を突きつけるエリナ。

「男子だけでプール使おうなんて酷いよ！ だからキ○タマ潰しに来たってわけ！」

「な、なにを……」

「あ！ もちろん実際に睾丸潰して去勢しようってことじゃないよ？ 喧嘩でキ○タマ狙い撃ちにしまくるってだけだから！ 安心して！ キ○タマたっぷりかわいがってあげるからね！」

「どこに安心すりゃいいんだよ！？」

いっている間に、周りから女子が押し寄せてくる。

まあ、二十人程度だが。

それでも、クラスの女子の全員で、関たちの二倍ではあるが。

「うわっ！ わあああああっ！」

「あ、清水！」

ボクシングを習っている、関の友人。頼れる戦友だった。

それが、我先にと水を掻き分ける。

「い、いやだっ！ キ○タマは……」

「おらあっ！ 逃がすわけねえだろ！」



エリナ。

いつの間にか、清水の斜め後ろから海パンを掴んでいた。

引き下ろす。

「あっ！ やめて……」

「ほらほら、チンチ○見せろよ！ この前も見せてくれたよね！ 清水のチ○ポでっかいてみんな言ってたよ！」

水の中だからまだまだ。

水が股間を守ってくれる。

ある程度は。

これが陸上だとエリナの急所攻撃は恐るべき効率で男子たちをなぎ倒していく。

水しぶき、次々と女子がプールに飛び込む。その左右の手にはビート板。

「あっ」

関が股を締める。

他の男子たちも同じだった。

ビート板で股間を強打したことがないものはいなかった。

百歩譲って自分がやっていなくても、周りのものがやるのを見たことがないものはいない。

「き、気をつけろ！ ビート板でキ〇タマ潰しにくるぞ！」

「そうだよ！ キ〇タマにお別れいうといいよ！」

そういう叫びを上げるときのエリナの目は獣のよう……ではなく、驚くほど澄み切っている。

そういう言動は彼女にとって心底楽しいのだろう。

彼女にとってそういう言動はごく自然なものなのだろう。

「おらっ！ 股開きなよ！」

「やめろ……おぐっ！」

次々と、股間の下に突っ込まれたビート板が放され、ロケットのように男に肉玉に減り込まれる。

「うっ」

運がいいものは太股に当たる。

「はぎいいいっ！」

悪いものは片玉に直撃して力が集中して白目を剥く。

そしてプールに沈み、一瞬後飛び上がる。

「ぶわあっ……あ、おぐっ！」

二枚もってきたビート板のうち、女子たちは片方はロケットにして男子の股間に叩き付け、もう一枚は水中専用の武器にしていた。

すなわち、沈めて、片手で持ったまま浮力で跳ね上げ、やはり肉玉を叩き潰すのだ。

「うぎゃっ！ ちょ、やめ……キ〇タマはやめろ！」

「キ〇タマ集中攻撃するのよみんな！ 力で勝る男子と、私たち女子が互角に戦うにはキ〇タマ狙うしかないよ！」

叫びながら、周りを見回す。

チラッと見ても、Y年生の仲間たちは全体的に小さいが、特に男子たちの方が小さい。

この年代だと、まだ女子の方が発育が早くて体格がいいし力も強いのだ。

その上集中的に急所狙いで来られては男子が太刀打ちするのは難しい。

「そうだそうだ！ 女子の自由のために、力が強い男子のキ〇タマ狙うのは当然よ！」

真っ先に叫ぶのは、ボブカットの少女。

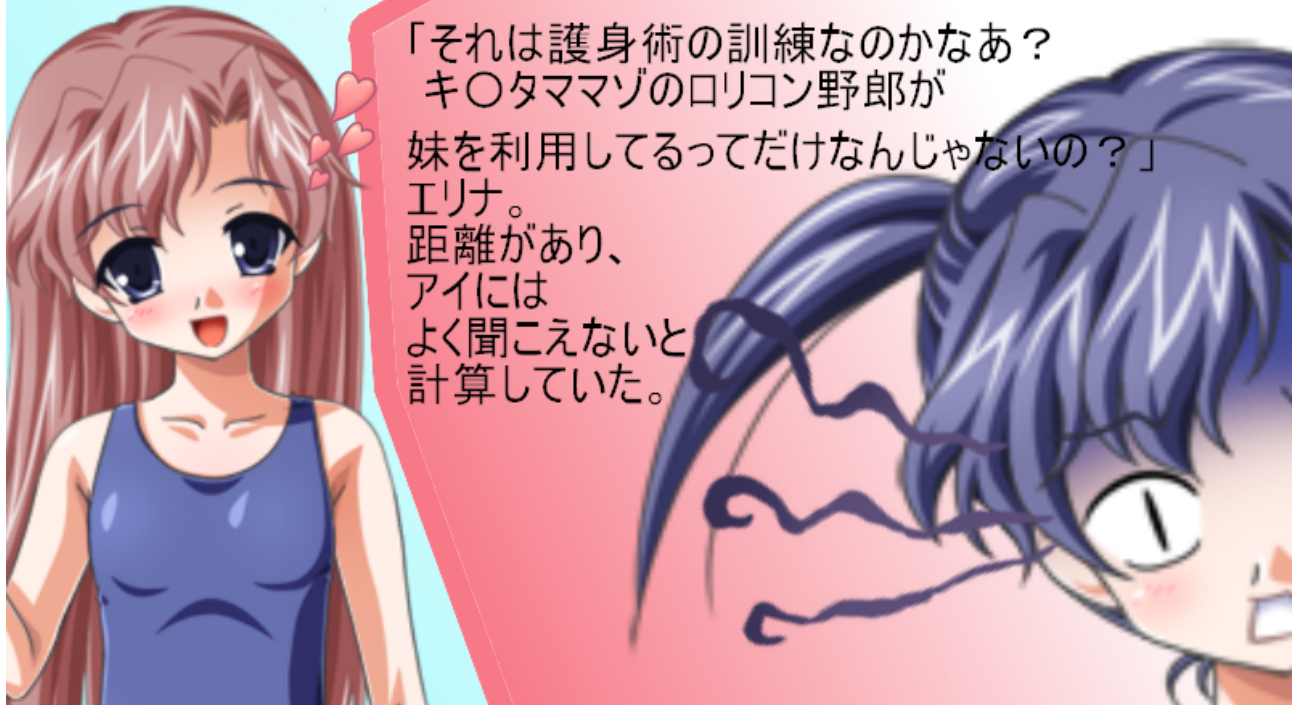
水田真理、という悩ましい名を持つ。柔術を習っているが、水中ではあまり意味が無い。

ボスンボスンと、ビート板を沈めては片側を男子の股間に跳ね上げてうめき声を上げさせている。

「そうだよ！ 私もお兄ちゃんとよく護身術の訓練してるもん！ お兄ちゃんはどんどんキ〇タマ蹴ってって言ってくれるよ！ でもおチンチ〇が立っちゃったら一時休憩で……」

「そうだよ！ 私もお兄ちゃんによく護身術の訓練してるもん！  
お兄ちゃんはどんだんキ○タマ蹴ってって言うてるよ！  
でもおチンチ○が立っちゃったら一時休憩で……」

前髪を少し編んだ長髪の少女、直江愛が叫ぶと、  
周りが一瞬静まり返る。  
首をかしげるエリナ。



「それは護身術の訓練なのかなあ？  
キ○タママゾのロリコン野郎が  
妹を利用してるってだけなんじゃないの？」  
エリナ。  
距離があり、  
アイには  
よく聞こえないと  
計算していた。

前髪を少し編んだ長髪の少女、直江愛が叫ぶと、周りが一瞬静まり返る。

首をかしげるエリナ。

「それは護身術の訓練なのかなあ？ キ○タママゾのロリコン野郎が妹を利用してるってだけなんじゃないの？」

「ぎゃああっ！」

ビート板二枚を束ねて前の男子の股間に減り込ませながら好き勝手なことを言うエリナ。距離があり、アイにはよく聞こえないと計算していた。

兄好き妹という夢のある存在であるアイは、気の弱い子だが兄を悪く言われると豹変する。

マリとアイが、エリナの一番親しい友人だった。

大体三人で一緒に行動している。

その二人が続くまでもなく、他の女子たちも一斉に賛同の声を挙げていた。

「エリナの言うとおりでしょ！」

「男子の方が強いんだから、キ○タマ狙いは当然！」

「弱い女子に嫌がらせしといて、キンちゃんは狙わないで？ 甘ったれるんじゃないわよ！」

「おごっ！」



「うぎっ、や、やめろ！」

ビート板で肉玉を潰しにかかるロリ少女たちに押しまくられる男子たち。

その様を見て、ニタ、と微笑むエリナ。

——みんな相変わらずちよろいわねえ。実際の所、ここにいる私たち見ればわかると思うんだけどね、私たちの年なら女子の方が体が大きくて力が強いってことぐらい。

本格的な体の発育が始まる年齢は女子の方が早い。

そういうことを知っていながら、男子との喧嘩を優勢にするために常に「男子の方が強いから急所狙いは仕方ない」というプロパガンダを行うエリナだった。

攻撃する女子だけではなく、食らう男子への宣伝も重要だ。

急所攻撃を不当だと考えていれば、対抗して無茶な反撃をしてくるかもしれない。

しかし「男子の方が強いから仕方ない」と男子のほうも思っていれば相手は無茶をしてこない。

男子の方が強い、という考えは男子にとっては心地よい話なので、簡単に受け入れられる。

男子たちは手を振り回すが、女子は手の長さでビート板の長さで攻撃してくるので届かない。

と、関が叫ぶ。

「み、皆！ 俺たちもビート板だ！」

ロケットにして跳ね上げたものがその辺に浮かんでいる。

飛びついて掴む。

「へへへ、これで互角だ！ こうなったらどうするよ？ え？ エリナ！」

「へへへ、これで互角だ！ こうなったらどうするよ？ え？ エリナ！」

「んー、確かに困るねえ。こりゃ互角だもんね」

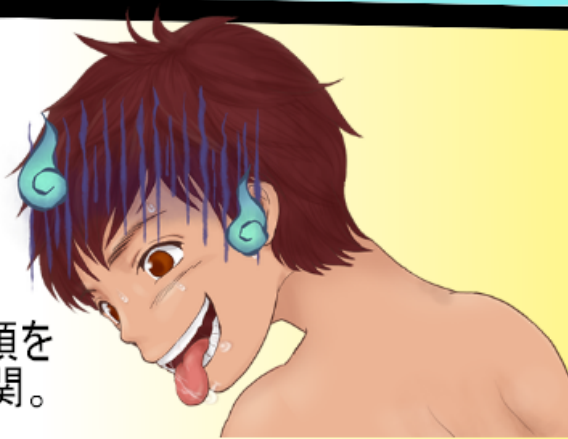
眉を顰めるエリナ。

「男子は女子の半分の人数しかいないし、同じ形で反撃しても、女子はキ○タマが無いから大した打撃は受けない。

男子はビート板でキ○タマ潰されるけど、女子はちょっと叩かれる程度。これは完全に互角だわい」



勝ち誇った顔を強張らせる関。



——ついでに言えば、男子は体格でも力でも劣るけど、これは秘密秘密。っていうか、見りゃわかるんだから本当は秘密もクソも無いんだけど。思い込みって怖いわね。

「んー、確かに困るねえ。こりゃ互角だもんね」

眉を顰めるエリナ。

「男子は女子の半分の人数しかいないし、同じ形で反撃しても、女子はキ○タマが無いから大した打撃は受けない。男子はビート板でキ○タマ潰されるけど、女子はちょっと叩かれる程度。これは完全に互角だわい」

勝ち誇った顔を強張らせる関。

——ついでに言えば、男子は体格でも力でも劣るけど、これは秘密秘密。っていうか、見りゃわかるんだから本当は秘密もクソも無いんだけど。思い込みって怖いわね。

ビート板で股間を叩きあう。

「いたっ」

「おぐっ！」

「あ」

「はぐあっ！」

「……」

「んごっ！」

「とっ」

「あぎっ！」

同じことをしあっているのに、男女の挙げる声はまるで違った。

男子が鈍い呻きを上げ、泣きそうな顔になっていくのを見る女子たちは目に見えて元気になってくる。

「はははは！ プール独占しようとするからよ！」

「っていうか関！ この前エリナに喧嘩で負けてクラスは女子が支配するって決めたでしょ！ その後でプールでまた負けてフルチンにされといて！」

「う、うるせえ！ あの約束はやっぱり納得いかねえんだよ！」

「あー！ もう、こんな奴と約束しても意味無いね！」

「そうだよ、こりゃもうキ〇タマ潰すしかないよ！ ねえ皆！」

エリナの叫びに、そうだそうだと女子たちが同調する。

別に本気で肉玉を潰そうというわけではない。

玉が潰れてもナノテクで一日で治る世界とはいえ、軽々しく潰していい訳が無いことはロリたちにもわかっている。

そこは、肉玉が無いとはいえわきまえている。

ただ、強烈に責めるつもりではあるし、万一潰れてしまっても「ああごめん」で済ます程度には軽々しかった。やはり肉玉を持たないものたちである。

関も実際潰されるとは思っていない。

だが、散々金蹴りの後でフルチンにされることは余裕で想像がつく。

真っ青で、周りを見る。

女子たちの包囲。

だが、抜けられないでなさそうだ。

そこで、関は考える。

囚人のジレンマという奴だ。

関が考えたこれからどう動くか、どうなるかのパターンは四つだった。

関が考えたこれからどう動くか、どうなるかのパターンは四つだった。



1 関だけがプールから逃げて、逃げ切れれば助かる。

2 関だけがプールから逃げて、追っ手に捕まればプールの中と違い、金蹴りの嵐だろう。



3 関が逃げず、仲間も逃げなければこのまま周囲からビート板で肉玉を削られつつ自由時間が終わるのを待つ持久戦。

4 関が逃げず、仲間が逃げて人数が一定以下になれば包囲から殲滅に移り、押しつぶされて終わる。多分プールから寄ってたかって引きずり上げられて、羽交い絞めにされて膝金蹴りでも食らわされて、その後フルチンというある意味フルコースを食らう。



関だけがプールから逃げて、逃げ切れれば助かる。

関だけがプールから逃げて、追っ手に捕まればプールの中と違い、金蹴りの嵐だろう。

関が逃げず、仲間も逃げなければこのまま周囲からビート板で肉玉を削られつつ自由時間が終わるのを待つ持久戦。

関が逃げず、仲間が逃げて人数が一定以下になれば包囲から殲滅に移り、押しつぶされて終わる。多分プールから寄ってたかって引きずり上げられて、羽交い絞めにされて膝金蹴りでも食らわされて、その後フルチンというある意味フルコースを食らう。

— どれがいいんだ……

一番自分が得なのは。

関が置かれている状況は一見囚人のジレンマだが、微妙に違う。

自分だけが裏切って逃げたからと言って得をすることは限らないところが違う。

まあ、どうでもいいことか。

— 戦うか？ でもなあ……

やはり、逃げる方がいいのではないか。

——逃げなかったとしても、時間切れまでキ○タマビート板で殴られ続ける。もしくは、もし仲間が一定人数逃げちまったら……

膝金、フルチン。

——それに、エリナのことだから別のキ○タマ拷問も考えるかもしれない。

逃げよう、と思う関。

「おぐっ！」

股間にビート板。ゆっくり考えてもいられない。

と、周りのものがチラチラと目配せしあっているのに気づく。

それは「一緒逃げようぜ」ではない。「こいつら裏切るんじゃないか？ ならその前に」というような感じだ。関がそういう目を向けているため、よく分かった。

「う、こ、こいつら……やめようぜ！ 逃げるなんて！」

「せ、関……」

「なあ清水よ、さっき逃げて、いい事あったか？ 海パン取られたただけだよな！」

「あははははは！ 清水くんチンチ○直接ビート板でやられて大変だよな！ 大丈夫？」

「あははははは！ 清水くんチンチ○直接ビート板でやられて大変だよな！ 大丈夫？」

マリ。

心配しているような口ぶりだが、先ほど逃げようとしてエリナに海パンを取られた清水の丸出し部分にずっとビート板を叩き付けていたのは彼女であるから、空疎に過ぎる台詞といえる。

というか「大丈夫？」といいつつ今も

**清水の股間に  
ビート板をぶつけている**

ギャグとしてやっているのかも知れない。

マリ。

心配しているような口ぶりだが、先ほど逃げようとしてエリナに海パンを取られた清水の丸出し部分にずっとビート板を叩き付けていたのは彼女であるから、空疎に過ぎる台詞といえる。

というか「大丈夫？」といいつつビート板をぶつけている。

ギャグとしてやっているのかも知れない。

「逃げても助からない！ 自由時間はもうすぐ終わるから！ それまで我慢だ！」

「皆、さっき言ったこと覚えてるよね？」

エリナ。

「逃げようとしたら絶対捕まえるんだよ！ キ〇タマ握ってね！」

「ほら！」

「ただし……」

チラ、と男子たち全員を撫でるように見ていくエリナ。

「あの子だけは逃がして」

黙りこむ男子たち。

あの子。

それは誰なのか？

そんなものはいない。

ただの口からでまかせだった。

真剣な顔のエリナだが、頬が少しだけ弛む。

——助けてもらえる人間がいる、自分かもしれない。そう思えば、人間の心は弱いもの、蜘蛛の糸にすがってしまう。私はその糸をたらすお釈迦様ってわけ。さあ、糸に縋りなさいカンダタ……全員キ〇タマゴリッゴリにかわいがってあげるからね！

とんでもないお釈迦様がいたものだが、人間性はともかくエリナの洞察力は優れたものだった。

関の言葉に、何とか時間切れまで耐えようかという雰囲気もあった男子たちが一瞬で動揺する。

そして、誰かが叫ぶ。

「あっ！ 待てよ！」

待てよ。

それは逃げようとしている人間を止める言葉だ。

誰が逃げようとしているのか？

いない。

見間違いだった。

ビート板をよけようと少し横に行った仲間を、逃げようとしていると誤認した。

叫んだのは藤田。

エリナにマリとアイがいるように、関には清水と藤田がいる。

そんな腹心だけに、まずい状況にならないか気を配っていた。

現状は、誰かが逃げ出せばお終いである。

十人しかいないのだ、一人ならまだしも、四人逃げれば戦線は崩壊する。

一人でも、その呼び水になるかもしれない。

なら結局は、一人でも終わりに近い。

そんな状況なので、藤田は逃げる人間がいないか神経を尖らせていた。

そのためのミスである。

が、それによって状況が無茶苦茶になったので結局藤田自身見間違いだったと気づくことはなかった。

誰が逃げようとしたと見えたのかもよく分からない。

まさに戦場の霧に全てが覆われた形だ。

待てよ、と藤田が叫んだ一瞬後、場が沸騰する。

「うわああああああっ！」

「やべええ！ 逃げろ！」

「逃げるしかねえ！」

「逃がすな！ キ〇タマ！」

「キ〇タマ狙うのよ！」

「キ〇タマ潰して！ キ〇タマ潰して！」

エリナのクラスのロリたちは肉玉について言及しすぎという気がするが、とにかく場が一瞬にして狂乱状態となる。

男子たちを二倍の数で包囲し、押さえ込んでいた少女たちだが、そもそもにばい程度で包囲は無理なのだ。

四方八方という、包囲されている側が一塊で突出してくるなら、一つの方向に包囲されている側と同じぐらいはいる。

まあ半分いれば、時間を稼いでいる間に周りが援軍に来るともいえるが。

ともかく、囲む方が結構な数がいるのは確実に言える。

相当上手くやれば、カンネの戦いのように少数が多数を包囲できるだろう。

だがエリナは戦いが上手いとは言えハンニバルではない、二倍程度で完全包囲は無理だった。

敵味方が狂乱すればなおさらだ。

「逃がすな！ キ〇タマ潰せ！」

エリナ自身、周囲の熱狂に引きずられてわめき散らしていた。

前の男子に飛びついて一緒にプールに沈む、というのはかなり危ない。金責めより危ない気がするが、まあそのまま引きずり込みはしないので大丈夫だ。

「うぼおおあ！」

水面から顔を出し、口や鼻から水を噴出しながら、プールの縁に突進する男子。

近くの者から次々とはい上がる。

それを止めようと、女子が海パンを掴んでひっぱる。

引きずりこまれたものもいれば、尻を丸出しにされ、そのまま足を抜いてプールサイドに転がり出たものもいる。

フルチンでどうするのかと思うが、狂乱状態なので何も考えずに走る。

が、すぐに女子が追いつく。

狂乱しているとはいえ、頭の奥では冷静で、フルチンで他のプールに走っていけないとわかっているのだろう。

「おらっ！ キ〇タマ！」

「おぐっ！」

ドグチャ、と景気よくマリの膝が男子の股間に減り込む。丸出しの肉玉と年齢にしては大きめの一物が小さな丸い膝に押し潰される。

蹴るだけですますエリナ組の女子はいない。

「おらおら、キ○タマゴリゴリ！」

「おぐうううう！ や、やめ……ひいいい」

肩を掴まれ、ロリの小振りな膝で容赦なく男性器を磨り潰されて悶える男子。

放すと、その場に膝を突き、転がって股間を押さえて悶絶する。

泣く余裕もなく、呻くだけだ。

……よく潰れないものだが、不思議と潰れるどころか、損傷という意味ではダメージすらない。ただ死ぬほど痛いだけだ。

それはその男子だけでではなく、周りで展開されている戦いで肉玉をやられたシヨタ全員にいえることである。

「ちょ、ちょっと待って……」

この期に及んで、まだ気弱な感じのアイ。

それでも、一様仲間のために敵を止めようとする。

それに肩を引っ張られ、振り払う男子。

「は、放せ！」

わりと近くにいたアイ。

手を払われるだけではなく、その手がパン、と頬を叩く形になる。

ム、と眉を顰めるアイ。

「痛いじゃない……」

海パンを掴む。

「え？ おぐっ！」

「痛いじゃないのよ！ このこのこのこのこの！」

「ごぐあああっ！ やめ、やめっ、あああああああ！」

ゴチャゴチャゴチャゴチャゴチャ、海パンを掴み、腰が動かないようにして連続膝金蹴り。

相手が白目を剥いて倒れかかって来てもまだ蹴りを続ける。

エリナの影に隠れてわかりにくいのが、アイも切れると相当な狂戦士ぶりを見せるのだ。

彼女ほどでなくとも、周囲の女子たちは次々と男子を金蹴り、金殴りでのた打ち回らせる。

人数が減ってくると、二人三人が一人に群がる。

元から女子の方が多いのだ。

「うわっ！ は、はなせ！」

ボクサーの清水。

両手を掴まれ、前からマ리에股間を撫でられる。

「偉そうだけど、チンチ○縮んでるよ！」

「キ○タマ蹴っちゃえ！」

「清水くんも、自分のタマタマだけ無事だと気まずいでしょ？」



「そ、そんなこと無い！ 俺は……おぐっ！」

「はいキ○タマキ○タマ」

膝蹴りの上、もちろん当然のように膝をグリグリして肉玉を股間の中で追いまわし、磨り潰していく。

「はぐぐぐぐぐ」

両手を離され、膝も引かれるともうその場に崩れ落ち、一步も動けなくなる。

ついに、立っている男子は一人だけになる。

動きがいい、関だけだ。

「うわっ、うわっ！」

周りから手を伸ばしてくる女子に、まるでゾンビでも見るような目を向けながら機敏に走り回る。

「こら逃げな！ それでも男なの！」

「皆で電気あんましてあげるから、キ○タマ洗って待ってなさい！」

「その後またフルチンだよ！」

関の悲劇は避けられないと思えた。

しかし。

「おい、お前ら何してる！」

声のほうを見て、エリナは眉を顰める。

「先生？」

一瞬、そう思えた。

だが海パンで、足はツルツル。

背がやたら高く、小柄なエリナから見れば三十センチ以上高く思えた。

それでも、○学生。いや、その中でも真ん中程度、ギリ上級生でしかないY年生である。

エリナたちと同じ年だ。

というか、このプールには今生徒はY年生しかいない。

「や、山本くん！」

目を輝かせる関。

その股間に、空気を読まない狂戦士アイの拳が叩き込まれる。

「おぐあああああっ！」

「オラオラオラオラオラオラオラオラアッ！」

**右でもなく、左でもなく、両手で殴りまくるアイ。**

足を止めた関の前にしゃがみ、容赦なく股間パンチの嵐。

右玉、左玉、拳で押し潰され、直撃の瞬間捻る拳に磨り潰される。

小振りな一物も容赦なく殴られ、潰される。

「はぐうううっ」

連撃が止まると、白目を剥き、その場に転がる関。

押し潰された肉玉が引き締まり、胴体にへばりつく。内臓が捻れ、息がつまり吐き気がする。

のた打ち回る力すらなく、ただ股間を抑えて転がるだけの関。

潰れても何の不思議も無い打撃を食らったが、不思議と彼の玉も損傷無しである。  
ただ痛いだけという、ラッキーな状態。  
まあ痛みだけでも、地獄のような状態ではあるが。  
しかし、ほとんどのものはそこに目を向けていない。  
女子たちは見上げるような巨体の同級生を一様に見ていた。  
山本、と関が呼んだ大男を。  
「お前らか、女の癖に俺たちに逆らってる奴らは」  
ジロリ、と芥子粒でも見るように下目使いの山本。  
四時間目が、間もなく終わろうとしていた。

体験版終わり

このあと男子たちは更なる金責めとフルチン、  
そしてそのまま担がれて学校の外まで運び出されるCFNM展開となります

続きは製品版でお楽しみください